

5070 以下は、Dialectica et Neoaristotelismus - Whitehead の検討(3) -
(『比較論理学研究』第7号(2010), p.1より)

さて、実際に、Whiteheadが取り上げている「自然の法則」に関する説は、次の4つである。彼は、次のように述べている。

5075
At the present time, there are prevalent four main doctrines concerning the
Laws of Nature: the doctrine of Law as immanent, the doctrine of Law as
imposed, and the doctrine of Law as observed order of succession, in other
words, Law as mere description, and lastly the later doctrine of Law as
5080 conventional interpretation. [A. N. Whitehead, *Adventures of Ideas*, p. 111]
現在、一般に行きわたっている「自然の法則」に関しての四つのおも
な説があります。すなわち、「法則」を内在するものとする説、「法
則」を課せられたものとする説、「法則」を観察された継起の秩序だ
とする説、換言すれば、「法則」を単なる記述だとする説、と、最後
5085 に、「法則」を規約による解釈だとする比較的最近の説がそれです。
[種山恭子訳『観念の冒険』, p. 499]

以下は、Dialectica et Neoaristotelismus - Whitehead の検討(3) -
(『比較論理学研究』第7号(2010), pp. 4-5より)

5090 Whiteheadは、すでに、『過程と実在』の中でも、彼の有機体の哲学の観点
から、ニュートンを評して、次のように言っていた。

5095 Those realists, who base themselves upon the notion of substance, do not get
away from the notion of actual entities which move and change. From the
point of view of the philosophy of organism, there is great merit in Newton's
immovable receptacles. But for Newton they are eternal. [A. N. Whitehead,
Process and Reality, Corrected Edition, 1978, pp. 81-82.]
5100 実体の概念にみずから基礎を置く実在論者たちは、運動し変化する現
実的存在の概念から逃げ出しはしない。有機体の哲学の観点からすれ
ば、ニュートンの不動の受容者immovable receptaclesには大きな長所
がある。しかしニュートンにとっては、それらは永遠である。[平林
康之訳、『過程と実在、コスモロジーへの試論』1, p. 121.]

5105 この言及は、実在の空間化あるいは空間的な把握に対して、ペルクソンが
反対の立場を取ることの指摘をするに際して、述べられている箇所である
が、ニュートンの立場に対する指摘としては正鵠を射ていると言えるであ
らう。ニュートンの記述そのものに戻るならば、「自然の法則」を賦課す
る「神」について、自然哲学の立場から、次のように述べていることが、

5110 ニュートン自身の立場を明らかに示していると言えるであろう。

In this third Book I have only begun the Analysis of what remains to be discover'd about Light and its Effects upon the Frame of Nature, hinting several things about it, and leaving the Hints to be examin'd and improv'd by the farther Experiments and Observations of such as are inquisitive. And if natural Philosophy in all its Parts, by pursuing this Method, shall at length be perfected, the Bounds of Moral Philosophy will be also enlarged. For so far as we can know by natural Philosophy what is the first Cause, what Power he has over us, and what Benefits we receive from him, so far our Duty towards him, as well as that towards one another, will appear to us by the Light of Nature. And no doubt, if the Worship of false Gods had not blinded the Heathen, their moral Philosophy would have gone farther than to the four Cardinal Virtues; and instead of teaching the Transmigration of Souls, and to worship the Sun and Moon, and dead Heroes, they would have taught us to worship our true Author and Benefactor, as their Ancestors did under the Government of Noah and his Sons before they corrupted themselves. [I. Newton, *Opticks*, 1952(1730, 4th ed.), New York: Dover, pp. 405-6(Book Three. Part I. Quest.31)]

5130 この第III篇では、私は光とそれが自然の機構に及ぼす効果について、未発見でのこっている事柄の分析を始めたばかりであり、それについて若干の事柄を暗示したが、その暗示を検討し改良することは、探究心の旺盛な人々の今後の実験と観測に委ねたい。そしてもし自然哲学がその全分野でこの方法を追求して、ついには完成されるならば、道徳哲学の領域もまた拡大されるであろう。なぜなら、われわれが自然哲学によって、第一原因とは何か、神はわれわれに対してどのような支配力をもっているか、またどのような恩恵をわれわれは神から受けているかを知りうるかぎり、それだけ、われわれ相互に対する義務のみならず、われわれの神への義務もまた自然の光によって明らかとなるであろうからである。もし邪神の崇拝が異教徒を盲目にしなかったならば、疑いもなく、かれらの道徳哲学は四元徳以上に進んだであろう。靈魂の輪廻を教え、太陽と月の、そして死せる英雄の崇拝を教える代わりに、かれらはわれわれに、かれらの祖先たちがその墮落以前に、ノアとその息子たちの統治のもとにおこなったように、われわれの真の造り主であり、恩恵者であるものを崇拝することを教えたであろう。[ニュートン/島尾永康訳『光学』, 岩波文庫, p. 357.(1721. 3rd ed.)]

5150 以上、見てきたような、「自然の法則」を賦課する「神」あるいは「超越的存在」を前提する、あるいは、要請する、ニュートンの自然哲学は、「理神論」に基づくことを典型的にあらわしていると言えるであろう。ニュートンのこの「疑問31」の最後の部分に、自らにとっては、「未発見でのこっている事柄の分析を」「探究心の旺盛な人々の今後の実験と観測に委ね

る旨が述べられている。しかし、このことが可能であるのは、まさに、「超越的存在」である「神」が「自然の法則」を賦課したからであって、ある意味で、「自然」についての単純化された考え、換言すれば、「自然の斉一性」という考えがもたらされたことによって、あたかも、「自然の法則」は厳密に遵守され、従って、それを探究する、ニュートンにとっての自然哲学、あるいは、自然科学が可能になると考えられるのであり、ガリレオ、デカルトらとともに、ニュートン自身も、その学説の細部において、差異はあっても、それぞれの自然科学的探究に従事することができたと言えるであろう。他方、「自然の法則」を賦課する「神」あるいは「超越的存在」を前提しない「内在説」だけでは、「自然の法則」が、何故、維持されるのか、説明が困難である理由と、「内在説」と「賦課説」の間でゆれ動く、古代の哲学者たちの問題（プラトンとアリストテレス、エピクロスとルクレティウス）と、さらに、「記述説」（あるいは「実証主義」）と「規約説」を経て、なお、「神」について語らざるを得なかった『過程と実在』のWhiteheadについて見ることを次の課題として、ひとまず、この稿を終えることにする。（未完）

5170 以下は、Dialectica et Neoaristotelismus - Whitehead の検討(4) - (『比較論理学研究』第8号(2011), pp. 7-8より)

ニュートンと神の問題とその後

5175 先に、我々は、Whiteheadが、『観念の冒険』(*Adventures of Ideas*, 1933)の中で、ニュートンの『プリンキピア』に言及し、美しいシステムとしての太陽系の考えは、「自然の法則」を課する「神」を必要とすることを明らかにしうるには、十分に究極的なものだと考えたということにふれた。その際、『プリンキピア』の一般的註の具体的な箇所として、該当すると思われるのは、次の箇所であろう。

5180 *Elegantissima haecce solis, planetarum & cometarum compages non nisi consilio & domino entis intelligentis & potentis oriri potuit. [Philosophiae Naturalis Principia Mathematica, Auctore Isaaco Newtono, Editio tertia MDCCXXVI, (paginae ab 526 usque ad 530), Scholium Generale]*

5185 'supremely elegant structure of the solar system cannot have arisen except by the device and power of an intelligent being'. [R.G. Collingwood, *The Idea of Nature*, 1945(1980), Oxford, pp.108-109.]

5190 ここで、きわめて優美な太陽系の諸天体は、知性的（叡智的）で能力のある存在者の配慮と支配なくしては生じ得なかったとされる、その知性的（叡智的）で能力のある存在者は、「神」であると解される。Whiteheadが取り上げている「自然の法則」に関する説との関係では、その「自然の法則」を賦課する「神」あるいは「超越的存在」を前提する、あるいは、要請す

5195 る、ニュートンの自然哲学は、「理神論」に基づくことを典型的にあらわしていると言える所以である。

このニュートンの「賦課」説に従って、カントは、次のように言うことができたのである。

5200

Die Naturforschung geht ihren Gang ganz allein an der Kette der Naturursachen nach allgemeinen Gesetzen derselben, zwar nach der Idee eines Urhebers, aber nicht um die Zweckmäßigkeit, der sie allerwärts nachgeht, von demselben abzuleiten, sondern sein Dasein aus dieser Zweckmäßigkeit, die in den Wesen der Naturdinge gesucht wird, womöglich auch in den Wesen aller Dinge überhaupt, mithin als schlechthin notwendig zu erkennen. [I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, B722.]

5205

5210

自然の探究は、自然原因の連鎖をたどり、自然原因の一般的法則に従ってのみ、その道を進む。なるほど、創始者という理念に従うのではあるけれども、自然の探究が、至るところでそれを探究する合目的性を、この創始者から導き出すためではなくて、却って、創始者の現存在を、自然の本質において求められるところの合目的性から認識するためであり、かつ、可能ならば、一切の事物の本質においても、従って、端的に必然的なものとして認識しようとするためなのである。[カント『純粋理性批判』, B722]

5215

5220

ここには、自然の探究を行なう者が、自然の法則を、自然に求めることができる前提、あるいは、根拠、さら言えば、探究することに意味がある保証としての、自然の法則を「賦課」した者を要請するどころか、却って、すでに認めた自然の法則から、「創始者の現存在を、自然の本質において求められるところの合目的性から認識する」ということが言われている。ここで、「創始者の現存在を・・・認識する」と言われているが、しかし、カントにとっては、その存在証明（論証）は、ある意味で、放擲されたのであって、「創始者の現存在を・・・認識する」ということを、どのような意味に解するべきか、我々は慎重でなければならない。そうではあるけれども、これは、明らかに、先のニュートンの線に、カントがあることを示す発言であり、これによって、逆に、次の発言が可能だったのである、と言わなければならないであろう。

5225

5230

Sie begriffen, daß die Vernunft nur das einsieht, was sie selbst nach ihrem Entwurfe hervorbringt, daß sie mit Principien ihrer Urteile nach beständigen Gesetzen vorangehen und die Natur nötigen müße auf ihre Fragen zu antworten. [I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, B XIII.]

5235

彼ら（自然の探究者）は理解した。理性が洞察するところのものは、理性自身が自己の計画に従ってもたらすもののみである、ということ、

理性は恒常的な法則に従った、その判断の原理をもって先行し、自然をして、その質問に答えるように強いなければならない、ということ。 [カント『純粋理性批判』、第2版への序言、B XIII]

5240

ここでは、逆に、自然の探究者が、自然を強制して、自然の探究者には、未だ明らかにはなっていないが、自然がもつ法則を、それがいかなるものであるのか、白状するようにすることが述べられているけれども、このことが可能であるのは、すなわち、先の引用で見たように、自然に法則を賦課した者（創始者）が前提されてのことである。ニュートンにせよ、カントにせよ、彼らの発言は、この前提の正直な吐露というべきであり、この後に続く、一部の人々とは一線を画するものである。

5245

文献

5250

Collingwood, R.G., 1945(1980), *The Idea of Nature*, Oxford.

Kant, I., *Kritik der reinen Vernunft*, hrsg. von R. Schmidt, Leipzig: Felix Meiner.

Newton, I., *Opticks*, 1952(1730, 4th ed.), New York: Dover.

ニュートン／島尾永康訳『光学』、岩波文庫、1983年。

Whitehead, A.N., 1967(1933). *Adventures of Ideas*, New York: Macmillan.

5255

ホワットヘッド／種山恭子訳『観念の冒険』（『ラッセル、ウイトゲンシュタイン、ホワイトヘッド』世界の名著70, 中央公論社, 1980年）所収。

Whitehead, A.N., 1978. *Process and Reality*, Corrected Edition. Edited by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne, New York.

A.N.ホワットヘッド／平林康之訳、『実在と過程、コスモロジーへの試論』

5260

1, 2, みすず書房, 1983年。

265

5270

5275